

中山晋平の新民謡（一）―須坂小唄

大月 和彦

信州中野市出身の作曲家中山晋平は、大正から昭和にかけて「カチューシャの唄」「波浮の港」「東京音頭」などの流行歌や童謡を作りつづけた。生涯に三千曲に及ぶ歌を世に送り、日本のフォスターと称されている。

一八才で上京した晋平は、島村抱月家の書生をしながら東京音楽学校を卒業、作曲生活に入った。抱月の依頼で作曲した劇中歌「カチューシャの唄」がヒットし、以後「ゴンドラの唄」「鉾をおさめて」などの名曲を送りだした。

晋平は、鈴木三重吉らが大正中期に始めた童謡運動にも加わり、「証城寺の狸囃子」「シャボン玉」「肩たたき」などを残している。

さらに、時代にふさわしい民謡をといて西条八十らの新民謡運動に参加し、古くから伝わる民謡とは違う新しい歌謡―小唄・音頭を作った。地域の特長を採り入れたご当地ソングの新民謡は、全国的に広がり、盆踊りや舞踊大会など地域に親しまれていた。新民謡の第一作「船頭小唄」（野口雨情作詞）の哀調溢れるメロディーは、関東大震災や昭和恐慌など暗い世相を反映した歌として好評だった。

関東大震災の前年に、故郷に近い信州須坂町の製糸工場から依頼されて「須坂小唄」を作った。当時全国的に起こっていた労働運動―特に社会の関心が集まっていた製糸工場の労働争議への工場側の対応―労使協調の路線に沿ったものらしい。晋平は野口雨情と須坂の製糸工場を見学し、そこで働く女性たちが気軽に口ずさめる歌を、と作ったという。機械音、カッタカタというリズムを刻む音が組み入れられている。

山の上からチヨイと出たお月

誰を待つのか待たれるか

ヤ カッタカタノタ ソリヤ カッタカタノタ

震災の年一二月、帝国ホテルで「須坂小唄」と童謡「テルテル坊主」の発表会が開かれた。ピアノ伴奏が晋平、歌は佐藤千夜子、藤間静枝の振り付けによる「須坂小唄」は、感銘を与えたという。翌大正一三年地元須坂での発表会は、ラジオで全国放送されて好評だった。